

東日本大震災 ともしび会ニュースレター

2023
April

ごあいさつ

2011年3月11日、12年前のこの日、東日本大震災そしてこの福島の地においては東京電力福島第一原子力発電所事故という悲しい出来事が起こりました。皆様からのご支援をいただいている学生たちは当時小学生でした。家や家族を失い、多くの経済的不安を抱え、喪失感と共に将来の夢もあきらめざるを得ない状況下にあった子どもたち。そんな子どもたちの声に耳を傾け、その健やかな成長を見守っていきたく立ち上げた「東日本大震災ともしび会」へは、日本各地、そして世界中の皆様がご支援をいただきました。

世界は今、新型コロナウイルス感染症のパンデミックから3年目の春を迎えようとしています。マスクのない、お友達と楽しく会話する、そんなあたりまえの生活がどれほど幸せだったのか、私たち一人一人が、今、その当時被災者だった子どもたちと同様に思いをかみしめています。

12年前に突然あたりまえの生活を奪われた当時小学生だった彼女たちは、悩み、苦しみながらも皆様からの経済的な支えをいただき、たくましい精神力を培い、自ら生きる力を育み大きく成長しています。今年ご支援いただいた4名の学生のうち2名がこの春、社会人として巣立つことになりました。

ご支援していただいたすべての皆様へ彼女たちからの感謝の思いをここにお届けさせていただきます。

東日本大震災ともしび会 代表 柴山 恵子

ともしびの会の皆様、ごきげんよう。この度は温かいご支援を頂き、心から感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

私は岩手県釜石市出身です。震災当時は小学校一年生でした。ここからは、当時の状況から避難場所での生活、皆様からのご支援を受けて感謝の気持ちを書きたいと思えます。

先程書かせていただきましたが、私は震災当時小学校一年生でした。その日は金曜日でしたので、教室で帰りの会をしていました。

その頃の釜石は雪が結構積もっていた時で、海が学校から歩いてちよつとしたところがありましたから風がものすごく冷たく寒かったのです。そのため、学校のストープの上には大きな金属製のたらいが置いてありました。私はそのすぐそばに座っていました。

十四時四十六分、帰りの会が終わろうとしたその時です。教室がものすごく揺れ、そばにあったたらいが私の方に飛んできたのです。揺れが凄まじく到底立てる状態でもなく、たらいのお湯が顔にかかり、ものすごく痛かったことを今でも鮮明に覚えています。

とてもじゃなく冷静ではいられませんでした。担任の先生の顔もこわばっていました。

それでも私たちに何度も声をかけてくれたことが一番の救いでした。揺れが収まった後、最上階の三階の教室に向かっていた時、隣の中学校の生徒たちから「津波が来るぞ、はよ逃げてください！」の言葉が聞こえました。

その時、小学校の校長先生は不在でしたので、副校長先生が「ごいしよの里まで逃げよう！」と言ったそうで、私はみんなで第一避難所だったごいしよの里に避難をしました。ところがそこでは予想外なことが起きていました。何と裏山が崩れていたのです。

いつもは崩れていない裏山が崩れていたため、先に避難していた方のごいしよの里の職員さんが「もうこれは津波が来る、もつと上だ、早く行こう！」と。その声は震えていました。大人も怖がっている。ただもう怖かったです。そこから第二避難所である介護福祉施設に避難したとき中学生がこう言ったのです。「海が…黒い…町が、学校が…家族が…」この声が聞こえました。その状況が分からなかったので行こうとしたら、もう海が町を飲み込んでいました。それを目の当たりにしたときは皆の悲鳴がすぐく、生きた心地がしませんでした。

た、もう海が町を飲み込んでいました。それを目の当たりにしたときは皆の悲鳴がすぐく、生きた心地がしませんでした。

その時、家族は…。と何も考えなくなりました。その後も津波が来たためもうちよつと高いところの石材店まで登り、横にあった本当に直前にできたばかりの綺麗な高速道路で走っていたトラックに乗せてもらい市内に行きました。

私の通っていた小学校と隣の中学校にいた全校生徒が全員生き延びました。幸いそこからおいちやんが歩いてきて泣きながら抱きしめてくれたことは忘れませんが、その体育館でおいちやんに家族の安否を聞くと両親の安否がわかりませんでした。両親は生きていましたが、生死を分ける状況にいました。その後は、市内の中でも内陸部に住んでいた親戚の家に身を置かせてもらい、今では家が建っています。現在は、家族そろって元気に暮らしています。

私はこの桜の聖母短期大学ではキャリア教養学科を専攻しています。他県から来たこともあり生活環境に慣れず、体調を崩すばかりでしたが今では笑いの絶えない学校生活と勉強に打ち込んでいます。私はあの震災の体験を忘れたくないという気持ちから、「福島字」という教科を取り福島のことを知ろうと行動をしています。同じ東北であり、同じく被害があった県。福島には原発の爆発もありました。当時は今を生きていることに必死で福島の原発が爆発したことも知りませんでした。知ったとしても3年ぐらいたった後でした。福島字を通しての学びをしながらも、地元釜石の被害をどうにか聖母生やシスターに伝えたい気持ちが大きくなっています。そのように気持ちが大きくなっていったのも、ご支援してくださる皆様のおかげなのです。感謝してもきれません。こんなにも幸せだと思える瞬間に感謝してこれからも頑張っていきたいと思えます。本当にありがとうございます。

(キャリア教養学科 一年)

ともしび会の皆様、ごきげんよう。

この度は二年間という長い期間にわたり沢山の温かい支援を頂きまして、誠にありがとうございました。

入学前は学校生活に不安が大きかったですが、皆様の支援を頂き、無事に卒業を迎えることが出来た今、改めて皆様には感謝の気持ちでいっぱい입니다。

皆様のご支援のおかげで、震災当時は小学二年生だった私ですが、当時の私には想像出来ないくらい、この校の聖母短期大学で素晴らしい体験をすることが出来ました。

入学当初は大学での勉強や、大学を卒業すること自体ばかり考えていましたが、皆様の支援を受けながら大学生活を送ることで様々な物や体験、人に触れ、就職について自分と向き合いながら、第一希望の会社に内定を頂くことができました。

これから、卒業を迎える時期になり、就職するまでの期間を大学の勉強だけでなく、最後の学生生活を有意義なものにし、社会人になる上で大切な教養を身につけていきたいと思っております。

震災当時、私は小学二年生で、下校中に震災が起きました。

経験したことのない揺れの大きさに友達と驚きながら立つのも精一杯で、そこから普段の生活とは全く違う生活になってしまい、幼いながら今後の生活や、学校のこと、そして家族のことや友達、家のことに対して大きな不安を抱えていたことを思い出します。

私の家は全壊してしまつたので、しばらくは祖母の家で生活させてもらいながら借り上げ住宅に引っ越して、私の新しい生活が始まっていきました。

学校が再開した当時は、転校することになったので、慣れない環境、普段とは全く違う生活に不安や悲しみを抱えていました。が、家族と励ましあいながら学校生活を乗り越えるような日々でした。

私が桜の聖母短期大学に入学したいと思つたのは、高校三年生の夏でした。

それまで、自分の進路に漠然としていたのですが、高校の先生が聖母なら先生たちのサポートも手厚く支援制度も充実していることと、私がいろいろなることを勉強してみたいと思つていたのでから勧められ、無事に入学することができました。

震災にあつてから生活が著しく変わってしまったので、進学したい気持ちはありましたが、本当にその選択をしていいのか自分なりに悩んでいた時期もあり、今こうして大学生活を送れていることは本当に皆様の支援のおかげです。

桜の聖母では、たくさんの方に触れて、人としても、勉強面でも教養を身につけられたと思えます。

現在は、自分の勉強のためや就職してからも自分の武器になるように資格試験の取得に向けて勉強中です。思うように学習が進まない日や、試験を迎えるまで結果を気にしてしまいが落ち着かないこともありますが、一生懸命頑張りたいと思えます。

また、卒業に向けて特別研究という大きな課題もあるので残された学生生活の中で悔いが無いように一日一日を大切に有意義な期間にしていきたいと思えます。桜の聖母短期大学が掲げる愛と奉仕に生きる良き社会人育成という言葉の通り、自分の周りや仕事に愛を持ち、誰かに何かを与えられるような社会人になることが私の目標です。その目標に向け、今できることを一つずつ乗り越えていきたいです。

最後にはなりませんが、改めて二年間という期間、ご支援をくださった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。皆様から学んだ人へのやさしさ、人を思う心を私の糧にし、卒業するまでの時間を大切に過ごしていきたいと思えます。

(キャリア教育学科 二年)

ごきげんよう。

この度は、二年間にわたり温かいご支援を頂き、誠にありがとうございました。

ともしび会の皆様のおかげで勉学に励んで充実した大学生活を送り、卒業を迎えることができた今、感謝の気持ちでいっぱい입니다。心から御礼申し上げます。

東日本大震災当時、私は小学二年生でした。放課後、バスを待っているときに地震は起きました。立つていられないほどの揺れで、先生方が慌てて避難指示をしていたのを覚えています。

その後体育館に避難し、二つ上の兄と親の迎えを待っていました。周りの子たちの迎えがくる中、なかなか自分たちの迎えが来なくて、私は不安で泣き出してしまいました。

そして、母が迎えに来てくれ、家に帰ると、家は半分傾いていました。

棚は倒れ、食器や冷蔵庫の中身は飛び出し、足の踏み場がなくなり散乱していました。

とても生活できる状況ではなく、それから祖母の家に避難しましたが、電気や水道も使えず、ラジオの地震速報におびえながら生活しました。

その後、被災地を襲つたのは福島第一原発事故による放射能です。

私は宮城に住んでいたのですが、住めなくなつたり引っ越しをしたりという状況にはなりませんでしたが、私の家では肉用牛を飼育しており、多量の放射性物質が含まれるのではないかと、健康に影響があるのではないかとという理由から食肉の売り上げが低下し、経済的に苦しい生活が続きました。

そんな苦しい生活が続いても、両親は習っていた卓球を高校まで続けさせてくれました。朝練や部活で忙しい生活をしていましたが、母は朝早くに起きてお弁当を、父は駅までの送迎をしてくれました。

そして、栄養士を目指そうと思つたきつ

かけも高校時代にあり、部活動でトレーナーさんが栄養指導をしてくださりました。

高校で卓球をやめると決めていたわたしは、栄養士の立場からスポーツ選手の役に立ちたいと思うようになり、顧問の先生から勧められ、現在ここ桜の聖母短期大学で栄養の勉学に励んでいます。

学生生活では、知らない土地での一人暮らしで不安ばかりでしたが、学校もアルバイトも両立させることができました。

また、学内、学外実習を通して、実際の栄養士の仕事を体験し、栄養士として必要なことを明確にすることができました。そして、二年生の十二月には栄養士実力認定試験があり、勉強に専念するためにアルバイトをやめたので、ともしび会の皆様のご支援のおかげで勉強に専念することができました。

春からは病院の栄養士として精一杯頑張つてまいります。

私が目指す公認スポーツ栄養士になるために、しっかりと経験を積んでいきたいと思えます。

また、家族やともしび会の皆様に返返しができるよう、日々努力していきたいと思えます。

最後になりますが、二年間不自由なく学生生活を送ることができ、勉学に励むことができたのは、ともしび会の皆様のご支援のおかげです。

皆様への感謝の思いを忘れず、今後も頑張つてまいります。ありがとうございました。

(生活科学科食物栄養専攻コース 二年)

ともしび会の皆様、「ごきげんよう」。
この度は、ご支援を頂戴致しまして、心より感謝を申し上げます。

私は、東日本大震災の時、小学一年生でした。下校途中に地震に襲われ、母の運転する車の中で地震が収まるのをじっと待っていた記憶が、今でも鮮明に蘇ります。

震災後、地元の浪江町から福島市へ避難し、小学二年生から、福島市の小学校に通い始めました。

初めは、今までいた環境から、知らない土地での生活に大きな不安を抱いていましたが、日が経つごとに、友人が出来、少しずつ楽しい学校生活を送ることが出来ました。

しかし、震災時の凄まじい轟音を思い出したり、ニュースで流れてくる様々な変わり果ててしまった慣れ親しんだ場所を見るたびに、子どもながらに恐怖を覚え、気持ちがふさぎ込むことが多くありました。

そんな時、母は私をよく図書館へ連れて行ってくれました。震災前から私は本を読むことが好きだったため、よく地元の図書館へ連れていってくれました。

最初はあまり気分が乗りませんでした。通うにつれて、本を読んだり、時には友達と一緒に宿題をしたりして、段々と図書館へ通うことが楽しくなり、次第に気持ちも落ち着きはじめました。

そこから図書館に通っていくうちに、図書館で働いている司書の方々に密かに憧れを抱いていくようになりました。

本場所が分からない時には優しく本場所を教えてください、やさしく話しかけてくれたりしてくれる司書さん達に、どこか安らぎを感じていました。

そして、中学生になり、自分の将来について考える機会が増えるにつれて、「私は図書館で働いてみたい」と思うようになりました。

中学生の時は図書委員を務め、高校生の

時には、より詳しく司書のお仕事や本に關わるお仕事について調べて、進学するなら司書の資格が取れるような所がいいと思うようになり、調べていくうちに、桜の聖母短期大学へとたどり着きました。

様々な情報を見ていく中で、資格が取れるだけではなく、就職活動のサポートが充実していたり、授業内容が知識を学ぶだけではなく、コミュニケーション能力を高めたり、プレゼンテーションについて学んだり、自分の能力を向上出来るような所にも心を惹かれました。

それから、面接の練習や履歴書の書き方を学び、晴れて合格しました。

入学当初は、右も左も分からなかったのですが、優しい先輩方や、やさしく頼りになる先生方達のおかげで、一年間は楽しく、かつ充実したものになりました。

一年間の中で、それまでの授業では学べないような知識や経験を身に付けることが出来ました。

例えば、プロジェクトに必要な能力や知識を身に付け、実際にその力とある地域を活性化するプロジェクトを行い、最終的にはプレゼンテーションをし、実行してもらった、というものです。

授業で学んだ知識を学んだままにせず、実践してみようという姿勢によって、その知識が自分にしっかりと身についていくと実感しました。

そうして学んでいく内に、あつという間に来年は最高学年になります。

二年生にもなると、就職活動や特別研究があり、ますます多忙で充実した一年間になります。

私は、二年生になったら、より一層力を入れたいことがあります。

それは、自分の能力をもっとアップさせることと、将来の夢に向けて努力をすることです。

私は、幼い頃から消極的で、人と話すこ

とが苦手でした。今までは、伝えたいことがあっても頭の中にある考えや思いを言葉にするという行為が苦手であり、相手に自分の考えが正しく伝わらず、コミュニケーションが上手いかなんかが多くありました。

しかし、桜の聖母短期大学に入学してからは、プレゼンテーションの授業などの機会を通して、少しずつ自分の伝えたいことを言葉にすることが出来るようになりました。

ですが、まだまだ複数人でのコミュニケーションが苦手な部分もあるので、グループでのコミュニケーションを通して、直していきけるようにしたいです。

更には、図書館で働きたい、本に携わる仕事がしたいという私の将来の夢に向かって、より一層努力を続けていきたいと思っております。

具体的には、就職活動に向けて、面接練習を行ったり、履歴書の書き方を学んだりするなど、より就職に向けての活動に力を入れていきたいです。

進級し、来年には最高学年となります。こゝまでは、本当にあつという間でした。

そして、こゝまでやる事が出来たのも皆様の助けがあつてこそです。

学園生活を支えて下さった方々の恩返しのためにも、自分の夢を叶える為にも、張り切って最後の一年を過ごしていきたいと思っております。

最後になりましたが、私は、小学生一年生の頃、東日本大震災に遭い、とても大変な日々を過ごしてきました。

それまで当たり前に行っていた生活が当たり前前に送れないという現状に目の当たりにして、精神的に不安定な時がありました。

しかし、そんな時に私を支えてくれたのは、本でした。

来年は最高学年です。最高学年として、就職活動や特別研究だけではなく、二年生

としての立ち振る舞いをしっかりとし、一年生の支えになることを目標としていきたいです。

そんな二年生になれるよう、努力を重ねて一年を過ごして、最後は笑顔で卒業を迎えられるように生活をしたいです。

このような生活を送ることが出来るのも、ひとえにともしび会のご支援があつてこそだと思っております。

ご支援を頂いた方々や、先生方、そして家族に支えられて、今の私があります。

その支えてくれた人達に対して、恩返し出来るような、立派な社会人を目指して今後は生活していきたいです。この一年間、本当にありがとうございました。

(キャリア教養学科 一年)



●● 東日本大震災ともしび会 ●●

■ 大震災からのあゆみ

2011年3月11日	東日本大震災発生
6月	震災により保護者を失った子どもたちの健全育成を目指し、宗教法人コングレガシオン・ド・ノートルダムと学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダムが「東日本大震災ともしび会」を発足。
2012年3月	支援制度変更 原発事故など二次被害で生活困窮な子どもたちも支援対象に。 寄付金は日本そして世界各地から355件総額26,818,178円。学生4名を支援。
2013年	寄付金は153件、総額11,912,622円。小学生を含む11名を支援。
2014年	寄付金は78件、総額5,262,154円。小学生を含む10名を支援。
2015年	寄付金は104件、総額7,043,874円。小学生を含む11名を支援。
2016年	寄付金は97件、総額5,444,388円。5名を支援。
2017年	寄付金は97件、総額4,066,766円。4名を支援。
2018年	寄付金は95件、総額2,900,752円。8名を支援。
2019年	寄付金は79件、総額1,808,240円。9名を支援。
2020年	寄付金は73件、総額2,347,509円。5名を支援。
2021年	寄付金は89件、総額2,124,417円。6名を支援。
2022年	寄付金は71件、総額2,316,822円。6名を支援。
2023年	現在4名の学生を支援しています。

事務局より

東日本大震災から、まもなく十二年目の春を迎えようとしています。十二年前、未曾有の震災・原発事故の直後に被災し親を失った子どもたちの存在を知り「桜の聖母は第二次世界大戦の東京大空襲で被災孤児となった十六名の教育から始まった今こそ原点に立ち返り被災した子どもたちが地域に巣立つまで長期的に支援したい」というシスター達の一声により、修道会と学院が一体となって「東日本大震災ともしび会」を立ち上げたのが始まりでした。

その後、支援は震災により家や家族を失い、多くの経済的不安を抱え、学業が続くことが困難になった若者たちへと向かいます。学院が学費の免除そして「東日本大震災ともしび会」が生活面での支援を行うようになったのです。

この十二年間でご支援は全国、更には海外からもたくさん寄せられました。

お陰様で、被災して家や家族を失い、多くの経済的不安を抱え、喪失感と共に将来の夢もあきらめざるを得ないような状況下にあった子どもたちは皆様の支援により生きる力をいただき、悲しみを乗り越えることができました。

「ともしび会」は、この十二年の間に述べ四十二名に支援を行い、上位学校への進学や保育士、栄養士などの社会人として各界に送り出すことが出来たのです。

卒業式の日、希望に胸ふくらませ、故郷の復興を誓う彼女たちの晴れやかな笑顔には胸が熱くなる思いでした。ご支援をいただいている学生との関わりから見えてきたことは、彼女たちがそれぞれがいくつもの困難、苦勞を抱えながらも皆様の経済的な支えの上にたくましい精神力も育んでいること、そして震災と原発事故を体験したこと、いのち、生きる意味、人生の生き方を真剣に考え、自ら生きる力を育み成長している現実です。

現在は、コロナ渦というまた新たな困難の中にありますが、この福島のにあつて

は、東京電力の福島原子力発電所の廃炉作業が遅々として進まず、汚染水を保管しているタンクの許容量が限界に近づき、新たに海洋投棄等の問題が生じており、帰還困難による避難の継続や新たな風評被害の発生等、日々の生活に不安な影を落しているのも事実です。

これらのことから、未だに支援を必要としている学生がいるという現実を踏まえ、もうしばらくの間は、本会の活動を継続して皆様からのお力添えを励みに今後も未だある福島の子どもたちを応援し、寄り添っていきたく願っています。

あたりまえの日常がどんなに幸せだったのか、震災と重ね合わせながら、皆様に感謝をし、希望に満ちた子どもたちが綴ったお手紙に胸が熱くなります。皆様からのお力添えを励みに今後も未だある福島の子どもたちを応援し、寄り添ってまいりたいと思います。

末筆となりましたが皆様からお寄せいただきましたご厚情に重ねて御礼申し上げますと共に皆様の上に神様が豊かにお報いくださいますようお願い申し上げます。

感謝のうちに

ともしび会事務局

熱海紀子・齋藤桑子

ともしび会事務局

熱海紀子・齋藤桑子

☎024(531)6805

Email : s-soko@ssg.ac.jp

寄付金受入口座

【ゆうちょ銀行】02230-4-126091
東日本大震災ともしび会寄付金口
【東邦銀行 本店】普通預金3682660
東日本大震災ともしび会
代表 柴山恵子